

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



子どもたちの元気な声が響き、地域住民の笑顔が生まれる場所（岩手県釜石市・鶴住居子どもひろば）

## 特集 地域のお店は『出会い系♥』

- 「私の居場所」がみんなのたまり場に ③  
和〜ちゃんち（宮城県多賀城市）
- お店が集えば出会いもたくさん ⑤  
復興屋台村気仙沼横丁（宮城県気仙沼市）
- めぐる幸せ 地域をつないで走る藤崎クルリン号 ⑦  
藤崎クルリン号（宮城県仙台市泉区）

東北の元気⑨ ⑨  
地域サロンまるわ（福島県郡山市）

まじわる災害公営住宅⑩ ⑩  
宮城野市営住宅（宮城県仙台市宮城野区）

S(支え合い)-1 グランプリ 第4回いがす大賞 活動提案賞受賞 ⑪  
トントントンカラリン 隣り組活動隊（香川県丸亀市）

【特別記事】仮設住宅の閉鎖と高台移転。新たな一歩に向けて ⑫

平成・向こう三軒両隣事情⑬ ⑬  
ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

場の力⑯ ⑯  
鶴住居子どもひろば（岩手県釜石市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント  
（東北文化学園大学医療福祉学部 准教授 三木 千栄さん）

特集

# 地域のお店は 『出会い系♡』

—お店で、出会う。

地域の集いの場所になっている飲食店で、  
復興へと向かうなかで生まれた商店街で、  
郊外の住宅地をめぐる移動販売車で。

新たなつながりが、生まれている。

これまでの関係が、深まっている。

いま、介護予防のためにサロンなど通いの場づくりが進められていますが、  
通いの場は無理につくらなくても、実はあるんです。  
日常のいたるところに。

地域のお店は、買い物をするだけの場所じゃないんです。

気軽に立ち寄って、お話を楽しむ場。

地域の人とつながる場。

新しい人とめぐり合う場。

そんな意味で、地域のお店は「出会い系」なんです。

—さあ、地域のお店へ出かけませんか。





子連れのお客さんが食事をしている間、お子さんをあやす龍淵さん

## 「私の居場所」がみんなのたまり場に

◎和～ちゃんち（宮城県多賀城市）

### ポイント

- 食事をしながらのおしゃべりで広がる仲良しの輪
- 少しだけ甘えられる、毎日通いたい居場所

宮城県多賀城市のなかでも、仙台市との市境に近い場所にある飲食店、「和～ちゃんち」は、昼時になると高齢者を中心とした常連客でにぎわう。毎日訪れる人も多いため、「同じメニューでは飽きてしまうから」と、店主の和～ちゃんこと龍淵和佳子さんは、できるかぎりお客さんの要望に応え、メニューにない料理も提供する。近隣にスーパーマーケットがあり、買ひものの行き帰りに寄る人も多いため、お客さんが持参した食材を使って、リクエストされた料理をつくることもあるという。また、メニューだけではなく、お客さんの身体の調子に合わせて、塩分を抑えたり、柔らかいものを出したりと、柔軟に対応することも可能だ。

お店ではアルコールの提供は行っていないが、常連客のなかにはまとめ買いした缶のお酒を龍淵さんに預けておき、お店を訪れた時に一日一本だけ出してもらって飲むという人もいられる。飲酒量が管理できるのももちろんのこと、ひとり暮らしだとという常連の男性客は、「ここに来て、みんながいるところで飲んだほうが美味しい」と満足そうに笑った。

「お互いに遠慮のない関係だから、気軽に希望を言い合えるの」と、龍淵さんは大らかな笑顔を浮かべる。

### 気遣いと思いやりで

### つくるみんなの居場所

ご主人の定年退職を機に、お店を始めたという龍淵さん。お店をやった良かったことは、「家の外にも自分の居場所ができたことと、知らない人と出会うきっかけができたこと」と話す。

龍淵さんの居場所は、みんなの居場所にもなっている。お客さんは高齢の人が多い。ひとり暮らしや、日中家でひとりで過ごすという人も多く、「ここに来ないとしゃべらないし、笑わない」と言うお客さんもいる。一日に一度、お昼ご飯を食べにお店に来ることだけが外出の機会になっている人もいっている。

お店を繰り返し訪れるう



和～ちゃんち  
店主 龍淵 和佳子さん

「ひとりでも入りやすい雰囲気になるように工夫しています」

ち、常連さんを中心に仲が深まり、お花見や芋煮会、忘年会、新年会などを開催するようになった。参加するのは10人前後。「気心の知れた仲間が集まるのは楽しい」と、常連の男性客は話す。

常連さんだけでなく、はじめて来た人も居心地良くいられるように、と龍淵さんは気を配っている。「お店にお客さんがひとりだけのときや、ひとりで来たお客さんには声をかけて、話し相手になるようにしています」。

また、常連さんのなかにも、誰にでも気さくに声をかけて、仲良しの輪を広げていくことが得意な人がいる。そんな常連さんとはじめての人の会話が盛り上がりつつある時には、邪魔をしないようにそっとしておくのだと龍淵さんは言う。

こうしたさりげない、細やかな気遣いが、お客さん同士の新たな出会いをつなぎ、お客さんにとって、『会いたい人がいるお店』にすることに一役買っている。



決まったメニューのほか、「おまかせ」の注文にも対応する。おまかせ定食 500円

「ほっと一息」  
憩える場のたいせつさ

お店がオープンしたのは、東日本大震災の発災直後の2011年4月2日。飲食店の勤務経験のある友人と2人で始めた。

まだ物資が不足しており、用意できるメニューもカレーのみという状態からのスタートだった。

営業している飲食店も少なかったため、お客さんは近所の人よりも、災害派遣でやってきた行政の職員や、ボランティアが多かったという。

お店は友人同士で集まり、各自の家庭の食事を

賄うために協働で炊き出しを行ったり、暖をとったりする場所としても役立つ。友人とおしゃべりは、非常事態のなかにあっても、ホッと一息つける時間になったという。気軽に集まっておしゃべりをする場所の必要性を感じた龍淵さんは、お店がほかのお客さんにとってもそういう場所になって欲しいという想いで、入口の看板に「ほっと一息」の一言を掲げている。

また、初心を忘れないために、毎年のオープン記念日には、カレーを半額で提供するサービスを行っている。

肩の力を抜いて過ごせる  
地域のお茶の間

お店を訪れるのは高齢のお客さんだけではない。子育て世代の、特に乳幼児を抱える若いお母さんも多いという。

ときどきお店を訪れるという、3歳と8か月の姉妹を連れなお母さんは、「お乳をあげながら食事ができ

るので助かっています。こころな少しくらいなら甘えられるので、子ども2人を連れて外食できるのはここくらいです」と話す。子どもはしゃぐ声にも気を遣う昨今だが、龍淵さんだけでなく、ほかのお客さんも、柔らかなまなざしで子どもたちを見る人ばかりだ。周囲に気を遣わずに食事ができるお店は、お母さんたちにとって貴重な憩いの場所のだろう。時には子連れのお母さん同士で仲良くなったり、同年代の子ども同士が遊び仲間になったりすることもあるといふ。

世代も性別もさまざまな人が気軽に集える、「地域のお茶の間」のような「和～ちゃんち」には、今日もにぎやかな声と笑顔があふれている。吉

DATA

和～ちゃんち

宮城県多賀城市高橋2丁目16-5  
定休日：毎週金曜日  
営業時間：午前11時～午後5時



閉村式にて、世界中への感謝を込めて風船を放った

## お店が集えば出会いもたくさん

◎復興屋台村気仙沼横丁（宮城県気仙沼市）

### ポイント

- お店という「集い場」が集まって、新たな交流の宝庫に
- ときには、大きく地域を越えたつながりを生むことも

2011年3月に発生した東日本大震災により、宮城県気仙沼市では、全体の7割ほどの商店が流失し、その後、プレハブを用いた仮設の商店街が11か所設けられた。最も早く、11年11月から営業を始めたのが、気仙沼港の目の前に建てられた「復興屋台村気仙沼横丁」。17年3月に閉村式を開き、多くの人に惜しまれながらの閉鎖となった。閉鎖は仮設店舗の使用期限によるもので、それまでのおよそ5年間は、さまざまな形の交流が育まれてきた。

### 商店街はお店の集い場

復興に向かう気仙沼の象徴の一つとして、地域に根差す商店街を目指し、出店するためには選考条件が設けられた。気仙沼の特徴を生かすメニューがあること、地産地消に努めることなどだ。魚やホヤといった海産物を中心に、気仙沼の特産品が集まった。メニュー・商品はさまざまで、店の温かい雰囲気と気仙沼の魅力が合わさり、何度足を運んでも楽しめるものになった。

フェリー乗り場に近く、仕事などで大島から本土へ通っている人が、帰りのフェリーを待つ間に立ち寄りたりもした。なかには1日に2〜3回同じ店に足を運ぶ常連客もいたほど、地域に定着していた。また、大勢の観光客や被災地支援の団体、ボランティアなどが訪れ、気仙沼横丁の料理や土産、おもてなしが全国の人たちからもよこげられた。

気仙沼横丁に店舗を構えた生鮮魚介類の販売業者が、気仙沼横丁内の飲食店にも卸売りをしていたり、店舗同士、気仙沼横丁内で食事のデリバリーを頼んだりすることもあったという。多様な得意分野がある、商店街だからこそ、自分のすぐ近くで頼ることができる。



全国の人たちが行き交った



## 復興屋台村気仙沼横丁

### 事務局 小野寺 雄志さん

「再建の場で、全国からいろいろな支援をいただいた」

店主同士が互いの店を行き来して利用することもあった。自分の店の仕事を終えてから、同じ気仙沼横丁内で食事をしながら、楽しみを共有したり、悩みごとを相談したこともあったそうだ。互いに助け合いながら、それぞれが切り盛りしてきた。

#### 新たな雇用の創出も

被災した店舗の再開のみならず、起業や新たな雇用創出にも役立ついた。震災後に会社を立ちあげ、雑貨や軽食を販売してきた株式会社気仙沼波止場<sup>わかふち</sup>。気仙沼横丁で営業していた商店が外部に新店舗を再建したことで空いた施設へ、15年8月に入った。クレープなどの軽食や飲みもの、お土産などを販売していて、老若男女のたまり場になった。

大学の同級生だという2人組が共同代表を務めている。1人が気仙沼出身だが、もう1人は県外出身者。震災前は気仙沼に来る機会もなかったという。それまでどおり県外に暮らしながら、気仙沼にも部屋を借り、定

期的に通った。知り合いが増え、いまや気仙沼のあちこちでばったりと会うことも多くなった。

地域のための店を目指し、高校生など、数人の地域住民をスタッフとして雇用してきた。震災で商店が減り、働く場は少なくなつたが、高校生なども働き、収入を得られる場を提供することができた。

#### 地域を越えたつながりも

敷地内には、仮設店舗が並んでいるだけでなく、小さな野外ステージが設けられていて、地域内外の人たちにより、さまざまなイベントが行われてきた。開催回数が多かつた横丁ライジングという音楽イベントは、東京有志が気仙沼横丁の事務局とともに企画・運営し、12年から年2回ずつ開催されていた。ステージパフォーマンスタのため、歌手やダンサーなどのパフォーマーが、貸し切りバスで気仙沼を訪れていた。バスには、出演者だけでなく、観光客も同乗。地元の人地域住民は音楽やダンスなどの出しものを楽しみ、それ



それぞれの店にふれあいがあふれた

に加えて、パフォーマーと観光客は、気仙沼の景色や横丁の料理も一緒に楽しむことができる。イベント自体、東京の人ばかりが出演するのではなく、地元の団体などもステージに上がり、主役を担う。地域内外の人が一緒に楽しい時間をつくりあげた。

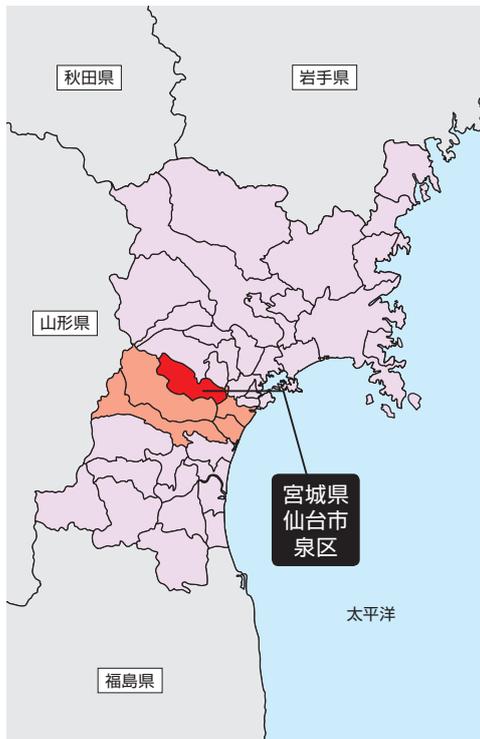
横丁ライジングでステージに出演した高校生が、大学進学とともに関東地方に暮らし、共演したパフォーマーと偶然東京で再会したり、同じ団体に所属して一緒に活動する機会にもつながっている。気仙沼で築いた関係性が、地元を離れても応援してくれている。

17年5月、気仙沼横丁事務局の小野寺雄志<sup>ゆうし</sup>さんは、これまでを振り返り、「被災した店主たちにとって、期限があるなかでの再建の場

だったが、全国からいろいろな支援をいただいた。そのつながりは、閉村後も続いている」と話す。仮設の商店街とはいえ、複数の店が寄り添い、地域内外の人が集まり、出会いが生まれた。個別の商店では育まれなかつたかもしれないつながりの形は、幅広く、大勢の人を元気づけてきたのだ。

また、現在、気仙沼横丁跡地の近くには、2階建ての共同店舗「気仙沼内湾商店街(仮称)」が建設されている。飲食店など24店舗が入ることができ、18年4月のオープンまでには、その周辺にも数店舗が順次営業を開始する予定だ。気仙沼横丁を出て、その新設商店街やそのほかで新たな店舗を構える予定の店もあれば、再開の見通しが立たずに休業している店もある。被災した商店の大きな再スタートにともない、それぞれの道を歩む。

気仙沼横丁で生まれた交流は、これからもたくさんの人を支えていくだろう。新しくなっていく店・地域でも、一層心強いつながりが生まれていくことを願ってやまない。



訪れる年齢層もさまざま。買いもの場で久しぶりに会って話し込む姿も

# めぐる幸せ 地域をつないで走る藤崎クルリン号

◎藤崎クルリン号(宮城県仙台市泉区)

## ポイント

- 移動販売は、地域住民の声が集まる場になっている

カラフルなイラストで彩られたトラックが軽快な音楽を流しながら、住宅街へ入っていく。公園内に車をとまると、そこに人の輪ができていく。移動販売車「藤崎クルリン号」の訪問光景だ。

生活支援、地域貢献に走る

宮城県仙台市泉区を走るクルリン号。住宅内の公園やコミュニティセンターの一角を借りて、車両スペースで商品を販売している。商品は、生鮮食品や惣菜、日用品など約300品目を取りそろえる。利用者からは「車が無いので、来ていただいてありがたい」「買いものに便利」との声が上がり、生活に欠かせない存在になっている。藤崎クルリン号の導入は2015年11月。背景には地域の高齢化と、徒歩圏内にあった小売店が閉鎖されて不便さを感じている「買いもの困難者」の存在があった。そうしたニーズに応えるため、市内で老舗百貨店を営む株式会社藤崎が、2014年度中心市街地再生事業補助金を活用して車両を購入し、移動販売を始めた。



荷物を運ぶのが困難な人には、藤崎クルリン号スタッフが自宅まで届けている

藤崎クルリン号の職員は、「ふつうのスーパーよりもコンパクトにまとまっていて、歩き回らなくてもほしいものがパッと見てわかるよさがあります」と、そのメリットを説明する。さらに、「通常おいていない商品もお客さんから要望があれば、次回積んできます。『マイショップ』のように活用していただければ。重いものを買われた方にはご自宅まで運んでいきます」と、地域住民に寄り添ったサービスを行っている。

利用者のなかには「ここに行くことが日課」「買いものはストレス発散にもなる」「スタッフの人とお話が楽しい」と話す人たちもいて、移動販売が外出の機会や交流の場にもつながっているようだ。

移動販売＋出張相談

16年4月からは、社会福祉法人泉白陵会が藤崎クルリン号と提携して、無料の介護・健康・栄養相談会を始めた。(17年5月現在、泉区の鶴ヶ丘一丁目公園と同三丁目公園の2ヶ所毎月1回ずつ開催している。)移動販売車の隣のスペースにテントを設置して、管理栄養士や生活相談員、看護師などのスタッフが待機する。買いもの客に「よかったですお茶を飲んでいきませんか」と呼びかけ、世間話をしながら相談にのったり、血圧を図ったりしている。泉白陵会の職員は、「藤崎クルリン号があるからこ



泉白陵会による相談会の様子

そ。相談会だけでは、なかなか人が集まりませんから」と併設の効果を語る。相談内容は介護サービスのことから、健康のことや家族との問題、「子どもと一緒に遊んでくれないか」というものまであつてさまざま。同職員は「これまではご自身で役所などに相談しないといけなかったのが、こういった場ができて、住民にとっての利便性が高くなっていると思います。専門分野外の対応も多いですが、住民と話すことで、地域でどういう問題が必要とされているかがよくわかります。それは、ふだんの(福祉施設を運営する)自分たちの仕事にもつながります」と話す。

今後、藤崎クルリン号は、コミュニティセンターやカルチャースクールとの連携、地域のお祭りへの出店といった中長期的な地域コミュニティ形成を視野に入れて活動する。移動販売をきっかけにした住民の居場所づくり、住民間のつながりづくりといった展開も期待される。田

専門家に聞く地域づくりのヒント

「お店」での交流づくりには、その時やその場所のニーズに適していることが重要!



東北文化学園大学医療福祉学部  
リハビリテーション学科理学療法専攻 准教授

三木 千栄(みき・ちえ)さん

1980年に理学療法士免許を取得し、国立大阪南病院勤務。1985年より京都府立洛東病院勤務。1998年からは大阪社会福祉協議会(在宅介護支援センター・地域包括支援センター等に所属)に努め、2007年より東北文化学園大学に勤務。

私たちが交流をもつことは、家族や友人、職場や学校、隣近所などの顔見知りだけではありません。自宅からちょっと出かけた先の、たとえば公園やスーパーマーケットにいる人たちとも、本人がその意思をもてば交流でき、家族や友人の関係が希薄になるいま、この交流が重要になります。今回の特集は「お店」での交流です。「お店」での交流の難しいところは、人が集まらないと交流できないことです。今回は、それぞれ異なったニーズの事例が紹介されています。

①復興というニーズで、出店者や関係者の話し合いで「復興屋台村気仙沼横丁」

津波により多くを失った地域で、生活を取り戻すために屋台村を企画された。関係者たちが生活を取り戻すために必要なこと、この地域の特徴を生かし、この地域のニーズに合う屋台村を話し合い、意見を出し合い、協力し合いながらいろいろ取り決めをしたことで、近隣住民だけでなく観光客も呼び込むこととなったと考えます。また、復興というニーズがあることから、さまざまところからの支援もあったでしょう。現在建設されている商店街でも、復興時点のニーズでなく、新しいニーズを当事者や住民、行政と話し合いながら、意見を出して取り決めていくことが重要になるでしょう。

②店主の人柄で、孤立というニーズの解決に一役「和～ちゃんち」

店主の人柄ははじめての人も居心地よく居られるよう心配りし、孤立に陥りやすい高齢者やひとり暮らしの方、子育て世代の人たちを

「和～ちゃんち」に引きつけて、さらに店主は人と人をも、つなげています。高齢者やひとり暮らしの方々は食事量が減り、低栄養の問題も抱えています。「和～ちゃんち」には高齢者やひとり暮らしの方が昼時には集まり、メニュー以外のものまで店主は提供しています。この店主は、この地域ではすばらしい社会資源で、宝でしょう。

③買物弱者というニーズに、補助金を利用して事業者の貢献「藤崎クルリン号」

最近、買いもの弱者は農村・山間地だけでなく、都市部などにも拡大してきています。買いもの弱者支援では、①交通手段等の整備、②宅配サービス、③移動販売などがあります。これらの手段の選択は住民の意向が一番重要だそうです。これらの支援には、規制緩和やインフラ整備などで行政の支援が必要となることもあります。また、事業者は行政に頼りきりでは事業を継続できず、経営的な方針で事業を進めることが必要だそうです。

移動販売先に人が集まることで、社会福祉法人が無料相談会を行っています。食料や日常雑貨等の移動販売ですから、集会所等での行事には来所しないような高齢者も買いものには来るでしょうから相談会には良い機会でしょう。

最近では、さまざまな年齢の人たちがインターネットに接続して人とかかわることが多くなり、リアルな形での人とのかかわりが減っています。さらに時が進むとその傾向が大きくなり、対策が必要になることでしょう。

DATA

### 地域サロンまるわ

所在地 福島県郡山市台新2-11-3  
連絡先 024-922-0823 (柳沼さん宛)  
活動日 毎週水・金曜日午前9時半～正午 (通常サロン)

42回目

市民リレー

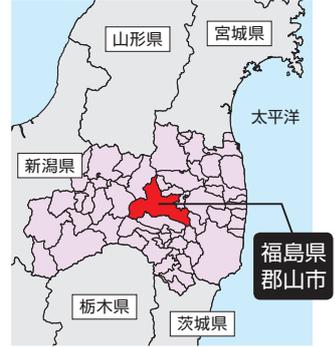
# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 一軒家を地域の集い場に 空き家を取得して開放

◎地域サロンまるわ (福島県郡山市)



4月から太鼓の演奏教室も始まった

「今年や豊年だ～よお！」の相馬盆唄を熱唱



代表の柳沼喜美子さん

「住民同士のつながりが薄くなり、子どもも若者もお年寄りも、みんな生きづらくなってきました」

こう話すのは、福島県郡山市で一軒家を地域に開放し、サロン活動を行っている柳沼喜美子さん(63歳)。

「住民が気軽に交流し、つながれる場がない。もう自分をつくるしかないと思って」

当初は自宅でサロンを開いていた。次第に厨房や駐車場が手狭となり、将来の「地域食堂」の展開も見据えて、近所の古い一軒家を取得。リフォームを施し、新たな拠点として2010年12月にオープンした。

サロンの名は「まるわ」。人々が集い、手を取り合って「輪」をつくり、「和」の関係のなかで笑顔になってほしいという願いが込められている。

活動は、「通常サロン」が毎週水・金曜日。お茶飲みのほかに、呼吸法や気功、歌、ハーモニカや太鼓の演奏などを楽しむ。「特別サロン」は、手芸品づくりの講習や健康などに関する講話のほか、花見や夏祭り、そば会、クリスマス会といった季節行事を行う。

季節行事には、近隣の親子連れなどが大勢足を運ぶ。

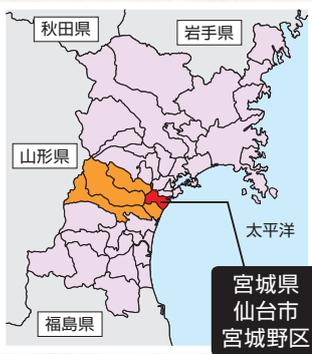
近くに住む83歳の女性は、昨

年12月の健康講話に参加したのをきっかけに、時々通うようになったという。「ここが買いたいもの通り道にあつて、ずっと気になっていたの。人見知りな性格でなかなか入れなかつたけど、知り合いに誘われてようやく来られるようになった」とよるこぶ。気軽に立ち寄っておしゃべりを楽しむのが、「すぐ気分転換になる。ストレス解消ですよ」とも。

サロン運営の担い手は、代表の柳沼さんをはじめ、60～80歳代の有志14人(うち男性2人)。全員「まるわ会員」として登録しており、月1000円の会費(傷害保険の掛け金相当)を納めて運営に携わる。

サロン活動だけでなく、子どもの学習支援、緊急の子ども一時預かりや送迎、移動弱者の通院・買い物支援なども行っている。これらの担い手も会員で、特に子どもの一時預かりと送迎は、保育に関する研修を受けた5人が担当している。

「今後は、健康・仲間・生きがいづくりを兼ねた畑仕事や、孤食防止の地域食堂、歌や太鼓演奏による介護施設訪問などにも取り組みたい(柳沼さん)まるわの「わ」がぐんぐん広がっていく。」



# 住宅内外のつながりを たいせつに、 新たな生活を形づくる

宮城野市営住宅  
(宮城県仙台市宮城野区)

まじわる！  
集団移転 &  
災害公営住宅  
第25回

仙台市の宮城野市営住宅は、復興公営住宅として2015年9月から入居が始まった。同住宅は10階建て1棟で、全88戸中86戸に住民が入居している（17年5月時点）。宮城野区役所の助言のもと、自治会設立に向けて住民が主体的に動き、15年11月から設立の準備を進めてきた。16年4月17日の設立総会を経て、正式に自治会が発足した。発足からの1年間で、夏祭りやコンサート、防災訓練、クリスマス会、新年会、ひなまつりといった多彩な活動を主催してきた。参加した住民からは、「楽しかった」「今度はいつやるの?」と毎回好評を得ている。住民同士が顔見知りになって、ふだんから声をかけ合えるような関係性も生まれてきた。このようなレクリエーション活動以外に

も、「クリーン作戦」を定期的に実施し、住宅内の清掃活動を住民たちで行っている。

こうした自治会活動の資金には、毎月の自治会費500円と宮城県の地域コミュニティ再生支援事業補助金、災害ボランティア・NPO活動サポート募金などを活用している。宮城野区のまちづくり推進課は、必要に応じて自治会運営の助言をするなどして、

活動を支援してきた。地域からも協力を得ており、つじがわか榴岡地区社会福祉協議会と榴岡市民センターの

共催でお茶っこサロンが行われているほか、宮城野区中央市民センターや榴岡地域包括支援センター、榴岡



夏祭りでは、幅広い年齢層の人たちが一堂に会して楽しんだ

地区民生委員児童委員協議会も諸活動に協力している。地域との合同防災訓練に宮城野市営住宅も参加したり、住宅内で行った夏祭りに地元の内会有志に参加してもらったりと、地域住民とのつながりも少しずつ育まれている。

自治会は、会長、副会長、幹事、総務部、会計部、厚生部、環境衛生部、防犯部の8部門で運営しており、若い世代も役員として活躍している。自治会長

の太田康治さんは、活動で留意していることを、次のように話してくれた。「この住宅は、被災3県の各地から住民が集まっています。それぞれご経験をおもちだ

と思えますが、育ってきた文化がお互いに違いますので、それをもち寄っても必ずしもうまくいきません。フラットな気持ちで、ここはこの生活を形づくってほしいと思います。支えてくださっている皆さんへの感謝の気持ちを根底にもって暮らしていきたいです」。

自治会では今後、住民主体のサークル活動も始め、住民が参加できる活動を増



夏祭りでは焼き鳥もふるまわれた

やそうと考えている。住民同士の昔のつながりを活かして、被災地で漁業や農業を提供してもらい、住宅内で安価で販売する計画を立てている。住宅内には高齢者が多く、そうした人たちの役に立ちたいと考えてのことだ。

太田さんは、「クリーン作戦のときに、あらかじめ分担を決めておかなかったことなど、運営で失敗したこともありますが、それを次に活かせばいいと思います。だから、失敗してもいいじゃないですか」と温かく話す。そんな思いを共有して、住民たちは新しいことにも積極的に取り組んでいく。これからの活動の展開が楽しみだ。



★活動提案賞★

トントントンカラリン  
隣り組活動隊  
(香川県丸亀市)

授賞理由

地域の人が毎日のように集い交流する取り組みはすばらしく、その活動を称え、ここに賞します。



香川県丸亀市内では毎日、無料の居酒屋が自治会館で開かれている。「トントントンカラリン隣り組活動隊」が主催する「マイセルフ居酒屋」だ。住民がお酒やおつまみを持ち寄り、おしゃべりやカラオケをして、日々楽しく過ごしている。会館時間は特に決まっておらず、メンバーは出入り自由。日中は黄色い旗を掲げ、夜は灯りがともり、それを見て次々に人が集まる。

代表の實近昭紀さんはその意義について、「ひとりですさぎ込むことがあっても、自治会館に寄って誰かがいれば、居なくてもカラオケを一曲歌えば、気が一気に晴れますよね」と話す。

トントントンカラリン隣り組活動隊は、丸亀市土器町にある夕陽ヶ丘自治会の活動の一環として位置づけられる。35年以上に渡って自治会長を務めてきた實近さんが、同活動隊の代表も担う。「昔から自治会で多様な催しを行ってきましたが、『開催して終わり』の単発企画になっていまし

た。『日々連続した楽しみ』をもたらすものとして、マイセルフ居酒屋の構想に行き着いたのが15年ほど前のことでした。全国各地を視察しましたが、これは初の試みだと思えます。持ち込みが自由で、料金もかからず、不満が生まれないのが良さです」と實近さんは説明する。

今年2月の「いがす大賞」では、同活動隊は「活動提案賞」に輝いた。活動のすばらしさに加え、登壇した實近さんの淀みない語り口や、きらめくようなこれまでの活動写真の投影が、高く評価された。出場をきっかけに、発表者同士、互いの活動状況について情報交換をして、新たなつながりも生まれた。終了後は、町内の自治会総会や全戸配付のコミュニティ誌で、受賞を報告した。

ゆくゆくは、マイセルフ居酒屋と同様の活動を全国へ広めたいと實近さんたちは願っている。普及すれば、ひきこもりや隣近所の疎遠化、高齢者の孤立の防止にもつながると考える。田

# 仮設住宅の閉鎖と高台移転。

## 新たな一歩に向けて

◎宮城県東松島市

宮城県では、災害公営住宅等の整備と転居が進み、仮設住宅の供与の終了や、仮設住宅団地の閉鎖に向けた動きが本格化している。

仮設住宅から徐々に住民が減っていくなかで、自治機能の維持や、仮設住宅に残る住民の見守り、孤立防止、また、仮設住宅集約にともなう環境の変化への対応など、終末期の仮設住宅団地が抱える課題は多岐にわたる。

仮設住宅閉鎖まで住民が安心して暮らすために、宮城県東松島市で行われている取り組みについて伺った。

### 「最後まで何事もなく」 仮設住宅自治会の想い

東松島市鳴瀬地区の仮設住宅は16か所の仮設住宅団地で、最大559世帯が居住していた。災害公営住宅や集団移転用地の引き渡しにより自主再建が進み、入居世帯数は減少している。

149世帯が暮らす、ひびき工業団地にある、ひびき工業団地第1仮設住宅には、現在34世帯が住む。自治会活動の担い手であった役員の方も多い。自治会活動は先細りの状況だが、一

方でこれまで以上に「住民を支えたい」という自治会の想いが強くなった。

ひとり暮らして体調の悪そうな人がいることに気がついた時には、自治会が見守り活動などとおして、その人の様子を把握することに努めている。

また、近隣に住む人が、さりげなく見守りを行うこともあるという。仮設住宅への入居からこれまで6年間一緒に暮らし、積み上げてきたつながりが、お互いに気かけ合う関係を生んでいる。長く同住宅の支援に携わる、鳴瀬サポートセ

ンターの片岡君江さんは、「最後まで何ごともなく閉鎖を迎えたいという想いがあるのだと思う」と話す。

自主再建で自宅を建てたものの、近隣に知り合いがおらず、寂しいと話す住民のもとに、自治会長が訪ねていくこともある。孤独感が少しでもやわらぐよう、話し相手になったり、以前暮らしていた仮設住宅のお茶会に招いたりしている。

野蒜地区に整備される災害公営住宅への入居は2017年の6月、8月、9月に予定されており、17年内にほとんどの住民

の転居が完了することが見込まれる。本格的な仮設住宅の閉鎖に向けて、18年の3月には残る役員さんも辞める予定だが、それまでは同住宅に残るひとり暮らしの高齢者や、持病を抱える人など、気にかかる人の見守りなどを引き続き行うという。

### ●寄り添う支援を続ける 多様な支援員

東松島市では16年4月から、被災者支援の体制が大幅に変更された。その際、市内でも規模の大きな3か所の仮設住宅にあった地域サポートセンターが、中央サポートセンター（東松島市生活復興支援センター）に集約された。これまで各地域サポートセンターに常駐していた生活支援相談員は、中央サポートセンターから各担当地域に赴き、仮設住宅やみなし仮設住宅、災害公営住宅などの訪問見守り活動を行う。各地域サポートセンターには2人の生活支援連絡員が残り、住民に近い場所での支援を継続した（本紙49号P16に



見回りを行う生活支援相談員と談笑する住民

### 関連記事）

中央サポートセンターの統括生活支援相談員で、鳴瀬地区の訪問見守り活動を担当する小池章さんは、震災直後から生活支援相談員として活動している。住民が仮設住宅へ入居した当初から同地区を担当しており、住民との信頼関係も厚い。「訪問の際に、住民が出てこなくても、壁越しの気配で、『寝ているな』とか『少し様子がおかしいな』などが、雰囲気でもわかるようになりました」と話す。

戸別訪問は2人1組で行う。同じく中央サポートセンターの生活支援相談員で鳴瀬地区担当の武田晴さんとともに、仮設住宅を一軒ずつ訪ねて歩く。住民と



東松島市ひびき工業団地第一仮設住宅

雑談をかわしながら、「身体の調子はどうですか?」「今日は風が強いから気をつけてね」など、気遣う言葉をかけて回る。先日退去した住民のことが話題にのぼり、「寂しくなった」と話す女性住民に、武田さんは「私たちは最後までいるからね」と優しく声をかけた。徐々に転居が進む一方で、さまざまな事情から仮設住宅に残る住民もいる。取り残されるような不安を感じるなかで、丁寧な見守りと寄り添う支援を続ける生活支援相談員の存在は心強い。



2人1組での戸別訪問。1人が声がけをし、もう1人は丁寧に記録を行う

また、中央サポートセンターには、交流支援や居場所づくりを担当する生活支援員も配置されている。仮設住宅自治会の活動が少なくなったり、解散してしまったりした仮設住宅で

も、閉鎖まで定期的にお茶会や交流会を行うことで、仮設住宅に残る住民の孤立防止に努める。

### ● 仮設住宅と移転先をつなぐ支援

同住宅には、震災以前鳴瀬地区に住んでいた人が多く、鳴瀬地区は野蒜小学校のあった高台に集団移転を行う予定だ。東松島市では最後の集団移転となり、16年11月20日に土地の受け渡しが行われた。

地区ごとの集団移転ではあるが、実際には駅や市役所の近くなどの利便性が高く人気のあるエリアに転居し、以前の居住していた地区の集団移転先には居住しない人も少なくはない。集団移転後の集落の人口は減り、震災前に居住していた地区とは顔ぶれも違うため、新たにコミュニティをつなぎ直さなくてはならない。

ひびき工業団地仮設住宅では、さまざまな愛好会や趣味の集まりがあり、そのなかの一つに「おとこクラブ」がある。同クラブは男



空室の目立つ仮設住宅内を、退去の確認もしながら歩く

性同士の交流を目的として結成された。月に1回集まって、ニユースポーツや料理、ゴルフなどさまざまなことを楽しんでいる。同仮設住宅だけでなく、近隣の仮設住宅に住む人も参加が可能な。

「こんなに楽しい集まりを終わらせたくない」というメンバーの声が多くあり、野蒜地区への移転後も、活動を続けるため、準備を進めている。仮設住宅で同クラブの活動を支援していた片岡さんは、「高台に移転したあとも、男性の交流の起点として人が集まってきてくれれば」と期待を膨らませる。そのほかに同住宅で活動していた愛好会やサークルなども、野蒜地区で継続する予定だと言う。「コミュニティづくりには、仲間づくりの場所があるこ

とがたいせつだと思う」と片岡さんは言う。

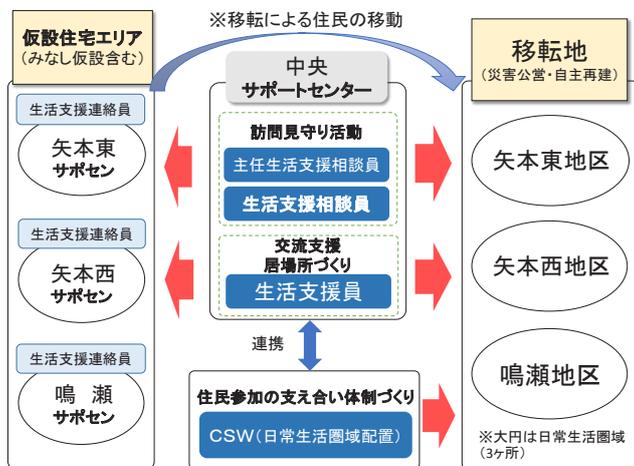
おとこクラブやその他の愛好会、自治会などで行っていた活動の運営やサポートは、コミュニティソーシャルワーカー（略称：CSW）に引き継がれる。

東松島市では、仮設住宅からの住民の移転地である矢本東、矢本西、鳴瀬の3地区に、1人ずつ同市社会福祉協議会地域福祉課のCSWを配置している。中央サポートセンターと連携し、住民を主体とした地域での支え合い体制づくり

に取り組む。

また、災害公営住宅への転居後も、生活支援相談員の訪問が継続される。地区ごとの担当制になっているため、小池さんと武田さんは野蒜地区の訪問も行う。慣れない新しい土地に転居しても、親しんだ顔が見られることは、住民の安心感にもつながるだろう。

仮設住宅と高台の集団移転地、双方を結ぶ住民の想いと各支援員の努力に支えられ、復興への新たな一歩として仮設住宅が閉鎖を迎える日も近い。



図：2016年度の東松島市社会福祉協議会による被災者支援体制

## ● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ、岩手県・宮城県・福島県で地域支援合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ。(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆、CLC発行)。



# その昔、大事なことはすべて お年寄りが教えてくれた

ご近所福祉クリエイション 主宰 酒井保

消滅する「昔ながら」

先日、東北暮らしの合間を縫って、久々に広島の自宅に帰ったときのこと。自宅前の道路脇の草刈りをしていたら隣のおじいちゃんから声をかけられた。

「たもつちゃん(僕のこと)、祭りにや帰ってくるんかい? 幟の世話をするんも年寄りばかりになったけえ、知恵はあつても力がないんよ。アタがおつてくれたら助かるんじやが」

僕が暮らしている地域は、小学校も中学校もなく、信号機もなく、コンビニもない。田畑を山が囲み、真ん中を流れる川に沿って人家が疎らに建つ景観は、昔、テレビで放映されていた『まんが日本昔ばなし』を実写化したような趣がある。そんな田舎の夏と秋の氏神様のお祭り前には、神社の参道入口に大きな幟を立てる『幟立て』と、お祭りが終わったあとに幟を撤収する『幟こかし』という力仕事があり、その担い手を募っているという意図を隣のおじいちゃんの声かけから察することができた。

「僕は帰れんけど、息子に返って来れるかどうか聞いてみるけえ」と言うと、「そりや

あ助かる!」とニコニコしながら帰っていった。

僕が子どもだったころ、お祭りの前はとても活気づいていたように思う。準備に追われる大人たちのあとをついて回るのが楽しくて、大人たちから雑用を頼まれると大人になった気分がワクワクした。「おい。この縄の縛り方は、どうするんじやったかいな?」「そりや、田中のじいさんに聞かやわからんけえ、ちよつと聞いてくるわ」

「年寄りに聞かないとわからないこと」がお祭りにはたくさんあり、その支度は、年寄りがいなければ出来なかつた。すでに祖父が他界していた子どもは、「お前んとこのおじいちゃんすごいな!」と言われていた友だちがうらやましくてしよがなかつた。

現役を退き、隠居暮らしの高齢者となつても、お祭りという「昔ながら」が世代間をつなぎ、暮らしのなかで自然に高齢者は敬われていた。いまのご時世、その「昔ながら」が消滅していった地域の話ばかりを耳にする。

「世話をするんも年寄りばかりになつたけえ、知恵はあつても力がないんよ」とは、隣のおじいちゃんの述懐である。5年後、10年後……僕の暮ら

す地域の「昔ながら」が気になつた。

一年に70日も

お祭りがあまるまち

広島県福山市鞆の浦は、昔ながらの景観が保たれた漁師まちである。宮崎監監督の「崖の上のポニョ」のモデルとなつたまちと言え、聞き覚えがある方も多いのではないだろうか。その鞆の浦の地域づくりアドバイザーとしてかわわりを持たせていただいて4年。僕は年に数回、空き家に宿を借りて、鞆の浦の日常を体験させていただいている。

「鞆の浦にやあ年に70日のお祭りごとがあつての。毎日、何処かしらでお祭りをやつとるんよ。道端の小さい荒神さんのお祭りから氏神さんの大きいお祭り。4年に一回とお祭りもあるし、7年に一回とお祭りもある」と茶谷仁さん(74歳)が教えてくれた。「7年に一回のお祭りになると、年寄りに聞かやあわからんことがようけあるんよ。去年がその当たり年で、どうしても年寄りに聞かやあわからん。それで寝たきりのじいさんをたたき起こして車いすに座つてもううて、お祭りの準備を整えたんよ。今思え

ば無茶なことよ。でもそのじいさん、お祭りの間はすつかり元気になつて、ずつと起きとつたんよ。あれにやあたまげた」と言いながら、その時の写真を見せてくれた。車いすに腰を下ろした紺色の法被姿の男性を、まちの老若男女が優しく取り囲んでいる様子が写されていた。

泥田の匂いと藁の匂い

お祭りという「昔ながら」には、そこに暮らす住民一人ひとりに役割があつた。お年寄りは「お年寄り扱いされない」。子どもは「子ども扱いされない」。そういう営みのなかで、「地域帰属意識」を高め合つてきた。

地域帰属意識……、いまでも、夏の泥田の匂いと秋の藁の匂いは、僕に祭りの近さと季節の変わり目を教えてくれる。昨日、息子に電話してみた。「夏祭りの日、家に帰つて来れないかな?」

「大丈夫だけど、何で?」「幟立てを手伝つてくれつて、隣のじいちゃんに頼まれたんだけど、帰れなくて」「いいけど、幟立てつて……何をどうすればいいの?」「それは大丈夫、おじいちゃんに聞いたらわかるから」

# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 成年後見制度の利用促進、今昔

2000年4月、介護保険と呼応して新成年後見制度がスタート。「判断能力」の不十分な認知症高齢者、知的障害者、精神障害者の自己決定を補完する制度としてさま変わりました。旧成年後見ともいえる「禁治産」制度は、読んで字の如く『財産を治めることを禁止される』ことで、「家制度」を守るようなものでした。

封建的な制度から、自己決定を支える仕組みに変わったことで、それ以来今日までこの制度と深くかかわってきました。

社会福祉士としての受任要請に応える体制である、「ばあとなあ宮城」の設立。専門職後見の適材適所での受任を目指した、仙台市社協の「成年後見サポート推進協議会」の活動。その延長上での「仙台市における市民後見人」の養成など、少しは役に立ってきたつもりです（皆さんの評価は不明）。

当初、虐待対応のなかでの後見人選任など、へビーな案件が続きました。権利侵害等でたいへんな状況におかれていた方々の受任に向けた対応では、市町村の担当者や地域包括支援センター、障害者の支援にかかるワーカーとの協働が広がり、法律家（弁護士や司法書士等）との連携も深まりました。そのなかで、もっと予防的な利用法はないものかという想いは徐々に増してきました。権利侵害の事後的な対応での申し立てより、事前的に権利擁護を考えた利用法です。しかし、「後見人の持つ権限が強すぎる」などの批判があります。障害者の方々からの、「何ごととも代理人が決めるのでは、本人の意思決定がはく奪されることになる」という批判は重要です。特に生活にかかる見守り（身上監護）で、代理人による権限が強いことで「保護的」になりやすい構図は悩ましい（私も、人に管理されるのは嫌！しかし、家では奥さんの言いなり？これは自業自得）。

こんな経緯のなかで、意思決定支援が成年後見制度の対立軸で出てきたことに戸惑いもありますが、意思決定支援のなかで、成年後見制度を修正していくことを考えています。ではまた。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



### 地域の福祉力を高めるための 支援者のスタンスを考える

被災者の移転先でのコミュニティ・地域の福祉力を高めていくために、支援者はどんなスタンスで地域に関わり、支援していけば良いのでしょうか？

コミュニティづくりや地域福祉の取り組みを支援する立場の組織として、また、専門職として、地域の福祉力を高めるために押さえておきたいことは、「地域づくりや地域の課題は地域住民が主体となって取り組み、解決するということ」。つまり、“住民参加・住民主体”で地域づくり、地域福祉活動を推進するということです。それは、「支援者が直接問題解決をする」ということではないということです。当然といえば当然のことです。

しかし、個別支援を中心に行ってきた人にとっては、とかく困っている人・ことに対して“支援者が直接関与し、問題を解決する”という発想・スタンスになりがちです。地域づくりや地域福祉活動の進め方は、「間接的な支援」が基本的なスタンスです。

かつて社会福祉協議会関係者は、地域福祉を推進する専門職を“黒子”“仕掛け人”などと称していました。その意味は、支援者が表に出たりリーダーとなって活動を引っ張っていく、ということではなく、あくまでも地域の住民や組織が活動の主体者であるということです。支援者は、地域に働きかけ問題や活動の必要性への“気づき”や“やる気”を引き出す支援の役割。問題への投げかけや学びの機会設定、動機づけ、取り組みに必要な情報や取り組みの手法、先進事例の紹介などをしながら、住民が活動の主体として成長していくことを支援していく役割であると思います。

かわり方も、地域の状況や住民、活動のリーダーの状況に応じたやり方で、住民の意識レベル、思いを尊重し、一緒に悩み、歩みを同じくしていくことがたいせつです。

地域の状況を見逃して、支援者がいくら高いレベルの目標を掲げ、熱い思いを持って伝えようとしても伝わりません。それは、いまは心のなかに大事にしまっておいて、地域の状況や住民の思い、歩みに合わせて、諦めずに根気よく支援していくことをお勧めします。

子どもたちの  
元気な声が響く。  
放課後の子ども居場所は、  
子どもの可能性を伸ばし、  
地域住民の笑顔を生み出していく場でもある。



放課後のあそび場



子どもたちが主役のかまっこまつり

放課後の居場所づくりを行ってきた。仮設住宅団地には、走り回る十分な広さはなく、声をひそめて遊ぶ子どもたちの姿があった。そのため、自由に子どもたちのやりたいことや行動力、笑顔を引き出したいと、遊び場を整備し、イベントを企画した。

岩手県釜石市鶴住居町「鶴住居子どもひろば」には、放課後の子どもたちが元気に遊ぶ声が聞こえる。子どもの居場所として、仮設住宅の談話室や地域の公民館などが活用されているのだ。

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校の柏崎未来さん(31歳)は、コーディネーターとして、地域ぐるみで子どもたちを見守るこの場を手掛けている。「子どもたちを、のびのび遊ばせたい」「地域の宝である子どもたちを、たいせつにしたい」という保護者や地域住民の思いを受けとめ、2012年1月より、

毎年行われる「かまっこ祭り」では、放課後の居場所が集まる子どもたちが企画運営を担う。祭りに向けて、地元の水を使ったオリジナルスライムの商品化企画など、やりたいことを仲間同士であげて、教え合う姿が見られる。「子どもたちが地域をたいせつに思う気持ちと、発想の豊かさと驚かされる場面も多いんです」と柏崎さん。祭りのサポートとして、自治会メンバーや保護者も楽しみに加わっている。さらにそうした場が、子どもを取り巻く環境の課題を一緒に考える機会にもなっている。

6年目を迎える居場所は、子どもたちと地域の人たちが、生きいきとした笑顔になれる場所として、これからもたいせつにされていくだろう。

☆次号予告 特集「畑」

平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

<初級研修>

- 【仙台会場①】6月1日(木) 宮城県本町第三分庁舎
- 【大崎会場】6月2日(金) 宮城県大崎合同庁舎
- 【東松島会場】6月22日(木) 矢本東市民センター
- 【気仙沼会場】6月23日(金) 宮城県気仙沼保健福祉事務所
- 講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
- 池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター応用講座>

- <講座1 地域支え合い活動の発見の仕方・広げ方~かかれた資源を見つけ出せ~>
- 【仙台会場】7月4日(火) 宮城県自治会館
- 講師：大坂 純(東北こども福祉専門学院 副院長)
- 池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)
- 木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 主査)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

55号掲載の「高校生の地域デビュー」がとても新鮮でした！これから社会に出る高校生にとって、財産になると思います。「地域の支え合い」というと、高齢の方のイメージがありますが、子ども・障がいのある方などの地域活動も高齢の方には活力になると思うので、これからの掲載も楽しみにしています。(仙台市泉区 Y・S)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail johoh@clc-japan.com

編集後記

県外出身の私も、宮城県に引越してきて3年が経ちました。それなのにプライベートな人脈があまり広がっていないのは、もしや地域のお店で過ごす時間を活用しきれていないからでしょうか？お客さんや店員さんなどと、ちょっとした会話をたいせつにしてみたら、ゆるやかにでも新しいつながりをつくれそうな気がしてきます。(清野)

バックナンバーがホームページで読めます！  
http://www.clc-japan.com/sasaesai\_j/